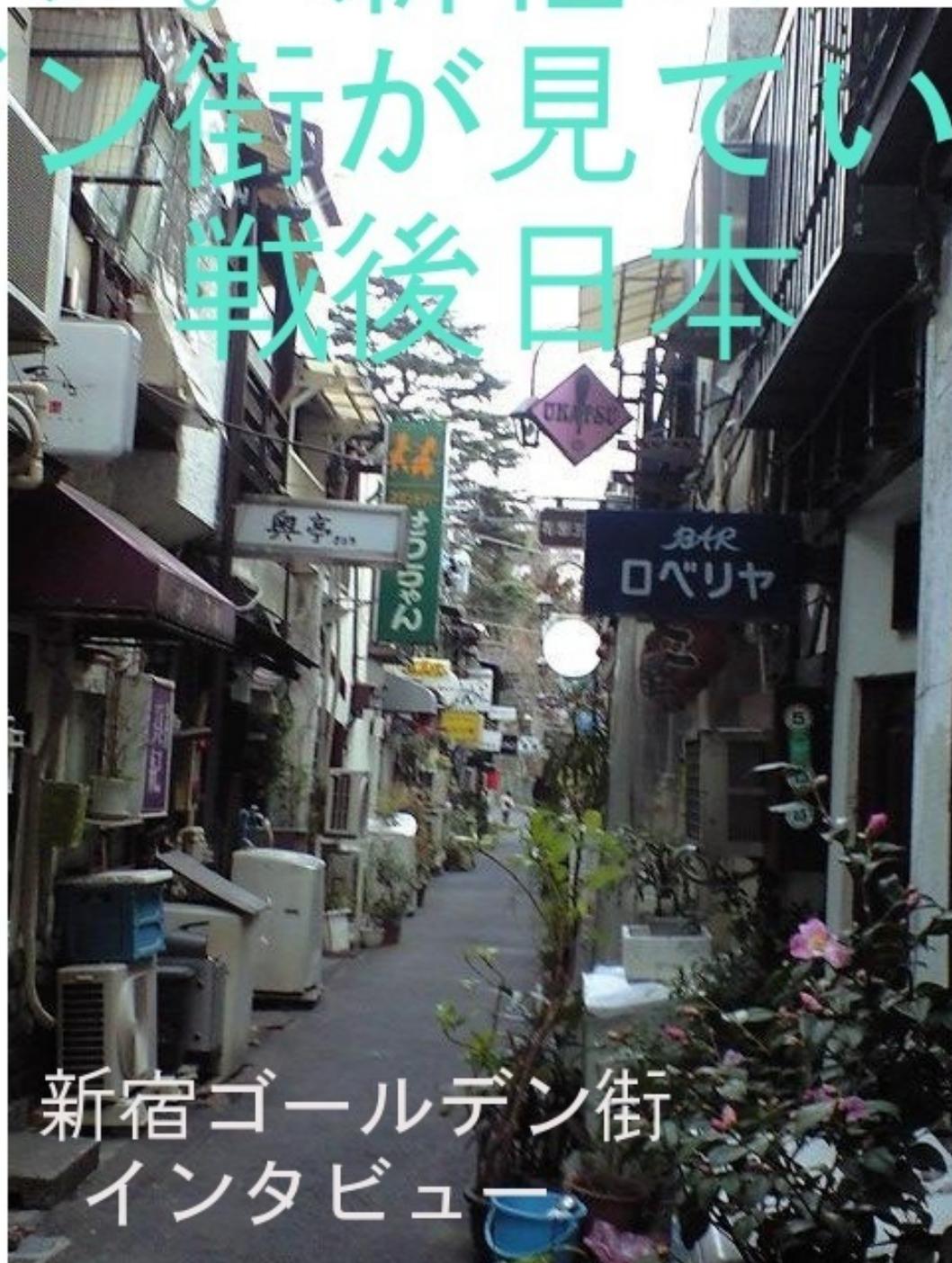


東京ガラパゴスタウン。新宿ゴールデン街が見ていた戦後日本



新宿ゴールデン街
インタビュー

リトルマガジン『カプリチオ』再録
Grasshouse

パリッ子も彷徨う、怪しいラビリンス

【編集部】 さっき、その路地を入ってきたら、三十代ぐらいのフランス人カップルが、携帯を片手に、立ったりしゃがんだりして、路地裏の写真を熱心に撮っていた。二人ともパリから来たそうです。……と、突然、空から白っぽい雲みたいな塊が、ふんわりと降ってきた。何だろうと思って見上げたら、掛け布団が一枚、太い電線にひっかかって、反動でブーイングとゴム紐のように上下して、ちょうどまい具合に、空中に止まった。どうやら最初から布団を干すために、そんな高等テクニックを使ったようです。びっくりしたパリジェンヌが、目を丸くして笑っていました。ゴールデン街の裏小路でのシュールな光景。まるで日本好きのフランス人映画監督が手がけた、洒落たワンシーンのようでした。

【奥山】 最近、この街はエール・フランスの観光ガイドにも載っていて、昼間でも外人客をよく見かけるようになりました。

【編集部】 それとやはり、ミシュラン効果も強いのですかね。二〇〇九年、フランスの『ミシュラン日本版観光ガイド』で新宿花園ゴールデン街が、二つ星を獲得したという。

——というわけで今日は、新宿三光商店街振興組合理事長で、ゴールデン街で三店舗を経営され、いわばこの街の生き字引といってもいい存在の奥山彰彦さんに、普通のお店紹介よりもディープなお話を、と思って伺いました。



奥山彰彦氏 1948年山形県生まれ。企画制作会社勤務の後、ゴールデン街に店舗を持つ。86年、不審火をきっかけに「ゴールデン街を守ろう会」結成。2003年より、新宿三光商店街振興組合理事長。アーティストとしても銀座村松画廊などで10回以上の個展を開催。

【奥山】 とつぜん空から布団が降ってきたそうですが、実は、この街の長屋ふうの店舗には、三階があるのです。けれども下の路地から見上げて、見えないようになっている。つまり三階が死角なんですね。これにはわけがあって、青線の名残なんです。当時は八百屋から銭湯まであって、大半が住み込み。一階が飲み屋になっていて、二階に二部屋、さらに三階にも「ちょいの間」という二畳ぐらいの部屋があって、女の子が待機していた。むろん、二階と三階には、それぞれ布団が敷いてあるわけです。

【編集部】 なるほど、お酒を飲んでいるうちに、女の子はどう？という感じになって、おもむろに階段を昇る。青線というと、非公認の売春ということですね。赤線の方が、行政が許可した売春。そして売春防止法が昭和三十三年に施行され、その歴史が終わった……。

さっきフランス人カップルを驚かせた布団は、死角になっている秘密の三階の窓から、脇の電線にひっかけて干そうとしたのかな。だから下から見えなかったわけだ。どこのママか知らないけど、かなり正確な布団投げテクニックですね（笑）。

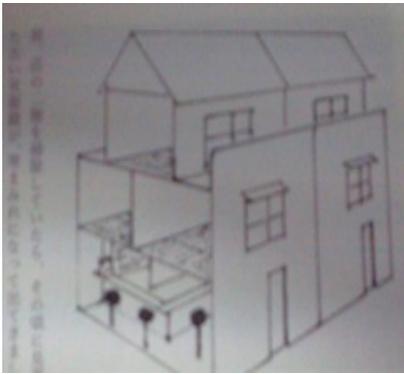
【奥山】 ゴールデン街の店は、補修に次ぐ補修を繰り返し、かなり昔とは変わってしまいました。しかし元々の

店の構造自体に、かつての名残りが感じられます。昔のママさんの話によると、当初は近隣のビルも少なく、店々の屋根も低かった。屋根の上からは新宿駅が見えたらしい。遠くから警察が近づいてくると、見張り役から伝令が伝わり、二階三階に潜んでいた客に、ちゃんと連絡が行き渡るのです。以前、店の二階を掃除していたら、その頃に見張りが使っていた古い双眼鏡が、埃まみれになって出てきましたよ（笑）。で、伝令が来ると、せっかくのコトの途中ですが、女に促されて、そそくさとズボンを履いて、ベルトを締めながら三階の窓から身を乗り出して逃げていく。長屋の一番端まで到着すると、そこから梯子を伝って、裏道にストンと降りていく。この細長い逃げ道は、三階の「ちょいの間」のおんぼろペントハウスの両脇に沿っているのです。

【編集部】その両脇が、下から見えない秘密の逃走用通路。

【奥山】一方、刑事が階段を上がっていくと、女も何食わぬ顔で、鏡台の前で口紅をつけたり、布団を被って薄目を開けて寝てるふりをするわけです。もちろん、誤解のないように断っておきますが、いまはただの飲屋街です。

【編集部】どちらから警察がやって来ても、反対側に回ればいい。生活の知恵だ。一見、バラックの集合みみたいな風景なのですが、ここには空間そのものに「詩」があるような気がします。人間も逃走するときは、窓をすり抜けたたりして縦、横、斜めに動かざるをえない（笑）。まるで探偵小説や、ヒッチコック時代のサスペンス。ビルの無機的なオフィスを舞台とするよりも、はるかに映画的ですね。



三階が「ちょいの間」（売春専用）。

警察が来たという通報があると、客は窓から逃げ出て、下からは死角になっている秘密の通路を逃げ去る。

ゴールデン街のジャンヌ・ダルク

【編集部】ところで、そもそもタウン誌でもない本誌が、なぜゴールデン街を扱うのかということですが、「闇市」の代替地として始まったこの街が、「東京の潜在意識」みたいなものを宿しているような気がするわけです。渋谷にしろ、六本木にしろ、東京の他の地が時代とともに、どんどん表層変化してしまうのに対して、ここはいまだにアングラ演劇や、政治の季節の気配を残している。狭い階段に、寺山修司や横尾忠則のポスターが貼ってあったりする（笑）。その強烈な磁場の本質とは、一体何なのか。――現在、奥山さんは、新宿三光商店街振興組合（花園ゴールデン街）の理事長をされていますが、この街との縁が出来たきっかけは？

【奥山】僕がゴールデン街に初めて来たのは、一九七〇年です。現代思潮社が作った神保町の美学校に通ってた頃、大久保さんという講師助手に、デザイン会社を手伝ってくれといわれた。それで、アルバイト感覚で働くようになったのです。夜は夜であっちこっちに呑みに連れられ、ゴールデン街にも出入りするようになった。最初に来たのは『ムササビ』という店。ママは秋田明大の彼女というふれ込みの佐々木美智子さん。みんな、おミツチャンと、愛称で呼んでました。それまでは、こんな町があるとはまったく知らなかった。他の飲屋街とは、何かが違うと思いました。おミツチャンは、思いこんだらどこまでもという、ジャンヌ・ダルク的な伝説的存在でしたね。ある集会で壇上でアジっている秋田明大と目が合った瞬間、この男とただならぬ関係になると直感したそうです（笑）。

【編集部】秋田明大というと、日大全共闘の議長ですね。東大の山本義隆と並んで、全共闘のシンボリック存在だった。

【奥山】ええ。いま、おミツチャンは伊豆大島に住んでいますよ。根っからの自由人で、執着がないというのが、店を開いても、簡単にやめてしまうんですね。『ムササビ』をやめた後は、歌舞伎町に『ゴールデン・ゲート』というディスコふうの大きな踊れる店を作った。時代の先駆けです。その後、南米に渡った。そしてブラジルで、昔の日本の移民団がたいへんな犠牲を被ったことを聞いたそうです。現地に渡ってみると、約束の地は、岩だらけの瓦礫にわずかな土が被っているような不毛の地で、誰もが愕然とした。結局、多くの移民が異郷の荒れ地の中で死んでいったといいます。おミツチャンは、地元でレストランを開いて資金稼ぎをしながら、アマゾンの奥地に自費で図書館を作ったり、そこで亡くなった日本人のお骨を拾い集めて、それをドキュメンタリー映像に収めるほど熱心に打ち込んだのです。

【編集部】さすがジャンヌ・ダルクと言われただけあって、凄い行動力。普通は同情だけでは、そこまで他者、しかも故人とはかかわれないでしょう。

【奥山】秋田明大と付き合うぐらいの女だから、女闘士みたいな印象で語られるけど、なかなかの癒し系タイプでした。移民団のお骨を抱えて、日本に戻ってきたとき、富士山がよく見える場所に慰霊碑を作りたいと思った。それでロケーションとして伊豆大島がいいだろうとっているうちに、敷地の提供者なども現れて、定住するようになったのです。

【編集部】若き日の奥山さんは、そんな癒し系、かつ人情家のジャンヌ・ダルクふうのママさんに惹かれて、夜のゴールデン街を彷徨うようになった（笑）。ママの連れあいの秋田明大さんは、どんな人でしたか。運動が挫折し、政治の季節が去った後は、郷里の広島で、自動車修理工場を営んでいるという情報を聞いたことがありますか。

【奥山】あの頃は、日大全共闘議長ということで、テレビにもちょくちょく出ていた有名人なので縁遠いと思ってたのですが、彼はよく『ムササビ』で飲んでました。周りはドロップアウトしたような連中。そのうち一緒に飲んだり旅などをするようになり、バスで九十九里に旅行にいったりした。しばらくして、秋田明大は京都に住むようになって、遊びにも行きました。明大さんはすでに別の子と結婚していたのですが、ある晩、その奥さんを残して、われわれ男三人で呑みにいったんです。そこに美人ママがいて、酔客三人で口説きはじめた。清楚な感じの京都美人でしたよ。

ところがそこに突然、男が現れたのです。何か因縁をつけられて、明大をボコボコに殴っちゃった。全共闘だか何だか知らんが、有名人のつもりでデカイ顔をするんじゃないと。もう、散々な目に遭って家に帰ってみると、これが空っぽ。あちこち食器が散乱し、ちゃぶ台がひっくり返っていて、カミさんがいないのです。男三人で勝手に呑みに行ったことに、腹を立てたらしい。

【編集部】かつての政治の季節は、みんな熱いですね。秋田明大という人も、全共闘のカリスマ議長というより、情けなくも愛すべき酔っぱらいのような印象ですね。

【奥山】それで我々は、しょうがない寝るかといって、ちゃぶ台を片づけて待っていたけど、なかなか帰ってこない。心配していると電話がかかってきた。例のカミさんは、お金を持たずに飛び出して、飲み屋でしこたま呑んでいたんです。金を持ってくるまで絶対に解放しないと、店に凄まじられた。ひょっとして、あれは常習なのかな。三人で連れ戻しにいった記憶がある。その後、この二人は別れちゃうんですね。

【編集部】どっちもどっちだ。ハタ迷惑だけど、人間臭いというか、感情の振り子の揺れ幅が大きい。ますますこれは演劇の世界ですね。今みたいにパソコンばかり囁りついてる若者を見ていると、むしろ懐かしいような気もする。

そういえば、今年（二〇一一年）の二月初めでしたか、永田洋子が小菅の東京拘置所で脳腫瘍の悪化で亡くなりましたが、彼女が連合赤軍の幹部として暗躍していた頃、奥山さんはゴールデン街事始めというわけですね。浅間山荘事件はテレビで見えていたのですが、衝撃的な出来事でした。雪の妙義山アジトでのリンチの全貌が次第に明らかになっていくなど、当時の騒然とした雰囲気は、よく覚えています。「自己批判総括」が流行語にもなった。今でも駅などに貼ってある警察の手配写真で、かつての活動家が疲れたような初老の顔を晒しているのを見ると、時代の流れを感じますね。一方で、東大新左翼の運動家だった仙谷由人が官房長官になったりと、隔世の感があります。ところで、その後、店を出すようになる切っ掛けは……。

開店まで。ヤクザ、赤軍派、総会屋。カウンターから見た深夜の面々

【奥山】最初は僕も客だったわけです。ゴールデン街には、店につくのが猫族、ママについてまわるのが犬族というようないい方がいます。その頃は僕も、ママに惚れて通ってほかの客と張り合っ、口だけではなく、殴り合いの喧嘩になったりした（笑）。結局は、まあ、適当にあしらわれて散財させられていたわけです。『ムササビ』が『ひしょう』という店に変わったときに、また通うようになった。

【編集部】猫と犬。酔っぱらいの二つのタイプですね。猫は家になつて、犬は飼い主になつく。けっこうこれは深い人間論かも知れない。

【奥山】新しい店になっても最初は客が来ないので、新人ママがひとりで藤圭子の『新宿の女』を歌っていました。それなりに絵になる風景でしたよ。そのころ、近くの幡ヶ谷に住んでいたの、下駄履きでゴールデン街でよく飲んでた。デザイナー見習いから始めてコピーライターもやったりした。飲み屋をやるようになったきっかけですが、その広告会社で内輪もめがあって、交渉の責任者に祭り上げられたりして、ほとほとうんざりしていたんです。そんな状態は、ゴールデン街の呑み仲間には空気でわかるわけです。それで仲間と店をやろうという話が持ち上がった。飲めて、女にもてて、居場所ができて、一石三鳥だと。

ところが話が進むと、まず店を探せ、資金は折半だといわれ、探し当てたのが、現在『奥亭』になっている店。今、評論家になってる最取悟の仲間が紹介してくれた。当時は『ぎよろ』とあって、マスターが、関西赤軍の資金集め担当とも噂されていました。あとで分かるのですが、手段を選ばず仲間すら平然と騙すような人物でした。ただ、刺身なども出してわりと値段の高い店で、じっくり呑むにはいい店でしたね。僕がその店に入ったのは、常連になって三年くらい経ってから。マスターがいろいろと手ほどきしてくれたのですが、言うことがふるって、愛人が十人いて、それぞれに子供が何人いて、ひとりに十五万ずつ仕送りしているなんていうんです。そのマスターから、店を譲るから専属でやれといわれて、一九七六年の春から専属になった。結局、店の資本も全部こちら持ち。何のことはない、最初から最後まで全部一人でやったわけです。

【編集部】ひょっとして、いつのまにか代表とか交渉役にされたり、理事長にされてしまったり、というパターンが多いんですか？

【奥山】いや、とくに意識したことはありませんが。誰もやりたがらない裏方をあれこれと引き受けているうち、結果的にそうになってしまうんですね（笑）。

【奥山】カウンターに出るようになって、宣伝はしなかった。自分が常連だった店と競合するし、その客を奪うことにもなる。しかしそのうち、客が客を連れてくるようになって、結果的には、それでよかったんですね。客層は関西ヤクザなんか、何人も出入りしていましたよ。そのヤクザは、赤軍と仲がいいんだなんて自慢していたりして。一方で、活動家達もヤクザ映画に夢中になっていたし、そういう時代だったんです。会社乗っ取りとかで、新聞雑誌をよく騒がしている総会屋もよく出入りしていました。芸能界では、馬淵晴子さんがさりげなく飲んでいて華がありましたね。ほかにもアングラ系の演劇人や、映画関係者、監督や役者も、しょっちゅう明け方まで飲み明かしていました。

【編集部】ヤクザと全共闘のコラボ（笑）。「とめてくれるなおつかさん、背中の銀杏が泣いている」という、今は懐かしい橋本治のキャッチフレーズを思い出しました。というわけで、カウンターの外から内部に、立ち位置が変わった。そもそもこの辺は、昔から青線・赤線の街だったのですか。

【奥山】もともとは、大手製薬会社の社長のお妾さんの広い土地だったらしいです。お金持ちの妾宅があるような、緑の豊かなところだったのですね。コマ劇場が閉鎖になりましたが、あの辺りも戦前は沼地で釣り堀があったらしいです。歌舞伎町というのは、一時、歌舞伎座を呼ぼうとして失敗した名残りが、そのままになっているのですね。そんな戦前からの風景も、東京大空襲ですべてやられました。戦後は新宿駅前の焼け跡に、ごしゃごしゃとした闇市が広がっていた。GHQマッカーサー命令によって、その闇市を撤去しろということになり、その代替地がここになった。ちなみに、現在、そちらの通り沿いにある吉本興業が入っている建物は、四ツ谷第五小学校の元校舎です。お客さんの中には、母校だったので懐かしいといってときどき来る人もいます。

【編集部】あの吉本興業が、廃校に入るといえるのは、わりとすんなりいったのですか？

【奥山】最初は反対が多かったですよ。関西系だし、お笑いプロダクションという偏見がありました。僕は、提案を聞いた時点から、校舎の改修費はすべて吉本持ちという条件だし、夜は真っ暗なままになっていた広い敷地に電気が灯るわけだし、これはいい話だと思っていました。若手コメディアンが、新たなお客も連れてきてくれるだろうし（笑）

【編集部】話題性もあって、結果的には大成功だった。花園神社と、ゴールデン街と、お笑いの吉本。無敵ですね。もともとが多面的な新宿ですが、いまの新宿中央公園辺りも、江戸時代は、弁天池あり、神社あり、滝ありというような、江戸名所図絵にも載っている庶民の行楽地だったとか。ヨドバシカメラの「淀橋」は、浄水場付近の地名だったくらいですから、水も豊富だった。

【奥山】角筈の新宿十二社ですね。熊野神社を中心とする風光明媚な景勝地だった。新宿といっても、エリアによって随分、雰囲気違います。この辺りは、現在は新宿の管轄になっていますが、昔は四ツ谷管轄で広い地域が三光町と呼ばれていました。警察・消防はいまでも四ツ谷管轄です。……ここから西の歌舞伎町からすれば、この花園ゴールデン街があることで、イメージ的には重宝がられているところがあります。歌舞伎町はご存知のように、暴力団とか喧嘩とかで、なかなかナマグサイでしょ。

【編集部】最近、中国系、韓国系、ロシア系、アフリカ系と、国際的ですね。何年前か、青龍刀が振り回されて人が殺されたなんて話もあった。派手できらびやかな反面、かなり殺伐としてますね。ぼったくりバーとか、風俗店を連想してしまう。ゴールデン街は、常連ばかりで入りにくい反面、慣れれば落ち着いて飲めるし、居心地がよさそうですね。

【奥山】ひとつは店の構造も関係していると思います。三坪が基本で、四坪半店のブロックがありますが、それにしても狭いですよね。マスターやオーナーと客の距離が近いということから、アットホームなものを感じる人が多いんじゃないですか。だから、客も知らず知らずのうちに店に協力してくれる。小さな独立国、解放区のような雰囲気がある。地域としても、思いのほかまとまっているところがあります。下町の商店街を連想させるような、店同士の地域社会というものが、ゴールデン街には残っているのです。

【編集部】ビジネスと大量消費の都市から失われたものが、何となく見えてくる一人間の物語。

【奥山】昔、須田慎太郎という写真家に、歌舞伎町を隠し撮りしたいので、とりあえず『奥亭』の店員ということにしてほしいといわれた。須田さんは、カウンターに入ったり、路地裏を撮ったりしていたのですが、ある日、歌舞伎町でゲリラ的に隠し撮りしているのをヤクザに見つかって、フィルムを出せと凄まじられた。咄嗟に、別のフィルムを渡して逃げたけど、すぐに気づかれて追いかけられた。ところがゴールデン街に逃げこむと、追っ手がぴたりとストップしたそうです。別のナワバリなんですね。そういう密約があったのか、こちらを異界と感じたのか。

【編集部】須田さんはもう大御所ですね。そういう裏ギョーカイの棲み分けも面白い。花園神社が発している気や結界を感じたとか（笑）。

【奥山】魔除けが利いたとかね。この地域における花園神社の存在感は大きいです。とにかく、この辺は歌舞伎町とは、どことなく異質な空間になっているのですね。

「新宿再開発計画」への血判状。残そうと努めなければ、バブルで消えた街

【編集部】ニューウェイブというのか、いま小綺麗な店もあり、若い店主たちは、偶然残った街だと思っているみたいですね。

【奥山】ゴールデン街が残ったのは、偶然ではありません。かなりしんどい思いをしてきて、ここまで来ました。

昭和六十年、ちょうど新宿に都庁の移転が決まった頃、バブル全盛を迎えました。花園ゴールデン街も「東京の一等地」という掛け声が出始め、大家も鼻息が荒くなって、家賃がどんどん上がってゆく。「新宿再開発計画」という合言葉で、みんなお金のことしか考えない。いつのまにか、今売ったら坪一億という話も出始め、ここも家賃が二倍にふっかけられました。要するに大家さん達は、われわれ店主を追い出したいのですね。

じつはこれは後日談になるのですが、以前『O2』の大掃除をしていたら、古い書類の中から、妙な紙の束が出てきた。このスペースは、元々は初代理事長の事務所として使われていたのです。開いてみると、くるくると巻物状になった長い紙で、血判状らしきもの。再開発に向けて全員一致で協力すること、途中で抜け駆けや、裏切り行為をしないこと——そんな誓約文が、毛筆でものものしく書かれていた。最後に、二、三十人の地主の肉筆の名前と、実印が押してある。地主一同が集まって、こんな秘密会議を開いていた。これには心底、びっくりしましたね。

【編集部】いやあ、当時の雰囲気、生々しく伝わってきます。

【奥山】何しろ、地上げ屋が黒塗りのベンツで飲みに来て、そのまま近所をちょっと歩いたと思ったら、何億という商談をまとめて、上機嫌で戻ってくる。当時の地上げ屋にとって、一千万二千万などはハンタ金だった時代です。

【編集部】地権者たちが浮き足立つのも、まあ、考えてみれば、仕方ないというか。

【奥山】そんな昭和六十一年の四月のある未明、火災が発生したのです。ご覧の通りの長屋なので、ママたちはみんな火に対しては、きちんとしている。不審火なんて、それまで無かったのです。『ぎよろ』のマスターの裏情報によると、火をつけたのは金で雇われた関西系の人間ということでした。火のつけ方が、素人のイタズラではないんですよ。

……この「ぎよろ」の元マスターが、関西赤軍の資金集めだったことは、すでに言ったと思いますが、実はバブル当時に、先頭を切って我々を裏切り、地上げ屋そのものに変身した男です。かなり姑息でえげつないことをやられました。

【編集部】元赤軍派の地上げ屋！ なんとも、奇々怪々ですね。いろんな邪推がわいてくる。仲間を裏切るとは、根っからの内ゲバ好きなのか（笑）。

【奥山】その後、火事は十回くらいは連続したと思いますが、その半分は日曜日の夜から月曜日の朝という時間帯。店の者がいない時を狙っている。当初から、これは怪しいぞ、地上げ屋の宣戦布告ではないかということで、店主の有志十人くらいで「新宿花園ゴールデン街を守ろう会」を立ち上げた。

【編集部】あの頃は、マスコミや雑誌でも、ゴールデン街はなくなるという論調が多かった。まあ、地上げ屋たちのバックに、大手資本、銀行が控えていて、世間を洗脳しようとしていたのでしょうけど。時期はズレますが、新宿駅から都庁に行く地下街でも、ボヤがあつた。一人死んだのかな。あれは段ボール住まいのホームレス追い出し作戦だったという噂が、いまだに消えない。

【奥山】ただゴールデン街は、不審火があつても、朝まで飲んでる客がけっこういるので、すぐ見つけられてボヤ程度で済んでしまい、彼らの目論みがなかなか成功しないのです。酔ってはいるものの、常連客がこの町の自警団みたいなものだから。

【編集部】素晴らしい！ 酔っぱらいの功德。地上げ屋たちは「ゴールデン街、消滅」という文字が朝刊に躍るのを望んでいたのでしょうか。やはりこの町を残そうという、店と客との一体感があつた。

【奥山】けれども、そんな水際作戦で一喜一憂しているうち、ついにバブルが弾けた……。あれだけ肩で風切つて歩いてた地上げ屋が見事にいなくなるとともに、今度は肝心の客足まで遠のいてしまった。あちこちの路地に、買い占められたのはいいけど、扉に板を打ち付けられ、閉じたままという無惨な光景が残った。見事なゴーストタウン化です。

【編集部】その間、わずか三、四年ですね。町の生態系が、まるごと変わった。

【奥山】バブルの悪夢から覚めて現実に戻ってみると、道路はデコボコで、酔客がよく蹴躓く。下水は逆流して、店の床に流れ込む。悪臭がするし、ガス漏れはしょっちゅう。地上げの嵐は去ったものの、街は冷えきってしまった。暗澹たるものでしたね。今後町が生き残っていくためには、全体のインフラ整備がどうしても必要だった。しかしそんな金なんか、どこにもない。

【編集部】時代のシーンが、回り舞台のようにぐるりと一巡りしてしまった。

【奥山】いま、老人しかいない山間部の過疎地の村落を、限界集落というようですが、都心のここも、限界集落みたいなきががあった。町全体がボロボロになっていた。店のオーナーは年を取っていくし、売り損なって悔やしがっている地主も、結構いましたね。全体的に閉塞状態で、客は来なくなるし、なんとかしなくちゃならない。かつての地上げ屋こそ消えましたが、限界集落化したゴールデン街が朽ちるのを待って、底値で買い叩こうと目を光らせている不動産屋もいた。インフラが整備されないままでは、やはり不衛生などの理由で、東京都や大企業に都合のいいように持ってかれてしまう。それで新宿区長に先手を打って、インフラ整備に向けての嘆願書を手渡したのです。しかしそんなもの、役人たちがすぐに動くわけがないですね。

【編集部】彼らはまったく無駄な空間としか、見ていないでしょう。何十階建ての多目的ビル、複合的なインテリジェントビルを建てれば、収益性が何十倍にもアップするとか、空中遊歩道で回遊性を確保するとか、緑豊かなアメニティ空間がどうのとか、都市計画屋さんたちが、広告代理店と組んで、分厚い企画書をいいように作り上げる。それでいて、地上二十階ぐらいに、ミニ・ゴールデン街バラック飲み屋をわざとらしく再現して「昭和の香り豊かな街角」を作ったりする。だったらそのまま残せよといたくなるけど。

さて、そうこうしているうちに、阪神大震災という未曾有の大災害が起こった。一九九五年の一月ですね。表現は適切ではないですが、それが結果的にゴールデン街にとっては、追い風になったと聞きます。

【奥山】じつは、あらかじめ嘆願書の中に、時限爆弾のようなキメの一句を潜ませていたのです。このまま放っておくと、この町が発火点となり、死者や負傷者が出て、新宿全体に及ぶ大火災ともなりかねないと。その時の責任は、新宿区がとってくれるのかと。

【編集部】いまどき、八百屋お七の振り袖火事かよ……と、ツっ込んでおきます（笑）。役人の責任逃れ心理を突いた知謀ですね。かつての地上げ屋の放火戦略の「逆発想」を使った。

今度の福島原発問題もそうですが、官僚・自治体・政治家の無責任体質を逆手に取って、彼らを使役する老獪な知恵を、そろそろ市民側も身につけなければいけない。「責任の所在をつきつける」という戦略が効をなして、新宿区からの数千万円もの補助金をみごとに獲得したわけですね。ちなみに、新宿区役所はゴールデン街から目と鼻の先ですね。

【奥山】歩いて一分。このインフラ整備予算とともに、さらなる追い風として、二〇〇〇年から施行された定期借家法というのが役に立った。これは、大家が一定期間を過ぎた借主を追い出すことができる代わりに、家賃が安く押さえられる法律です。これで逆に、若者たちの新規参入がしやすくなって、町の新陳代謝が活発になってきた。

……店主たちの結束とインフラ整備、そして定期借家法、この三つの要素が支え合って、ゴールデン街の灯を消さなかったのです。もうひとつ大切なのが、シンパのお客さんたちの応援。どれが欠けても駄目でした。

【編集部】地域が行政を動かしたという、見事な一例ですね。これは過去の一挿話に終わらず、今後の地域作りのサンプルにもなると思う。少し古いけどNHK『プロジェクトX』を連想しました。あの番組は、残念ながらヤラセ疑惑で潰れちゃいましたけど。

……最近の日本は、ネットすら監視される憲法違反国家になりつつありますが、少しずつ生活者・市民の側が、情報戦を展開できるようになっている気がします。奥山さんたちの活動を「町の救世主」「ゴールデン街中興の祖」とか持ち上げると、他のマスターやママさんたちに、また叩かれるのかな（笑）

路地を吹く新しい風。アート展、フリーマーケット開催

【編集部】最近はそのニューウェーブで、若い子たちが思い思いのアイデアで企画を立てたり、手作りのディスプレイをしたりして、個性的な店も増えたようですね。それから、ゴールデン街でアート・イベントをやっていますね。

【奥山】『GAW（ゴールデン街アート・ウェブ）』。現代美術作家でもある『久紹』のママが発案者で、99年のことです。ゴールデン街全体をひとつの美術館にしようというイベント。秋山祐徳太子が大黒様の格好で、「ゴールデン街にゴールドを！」と叫びながらニセ金貨をばらまくなどのパフォーマンスとか。マスコミも殺到しました。僕も30号の抽象画を10点ほど制作しています。

記憶に残っているのは、覗き部屋のような仕切りボックスを設けて、リアルな男女の下半身だけを、上から下まで何十体と壁に架けてある異様な蠟人形のオブジェ群。客席にも道祖神仕立てのペアで展示しました。エロティックで、ちょっとシュールな立体作品です。

男性はともかく、女性客は嫌がるのかと思ったら、結構そうでもなくて、含み笑いして出てきたり、中で大笑いしていたり、なかなか出てこなかったりと、意外にこの蠟人形は、受けがよかった。その後『GAW』は巡業みたいな形で地方も回ったりして、青森の竜飛岬まで行きましたよ。ゴールデン街では二回ほどやったけれど、店同士の面倒な関係もあり、そのあとはちょっと滞ってますね。

【編集部】あのアート・イベントを再開して欲しいという要望も多いとか。ここは想像力の解放区でもあるわけですね。大袈裟に言えば「精神の自由」の砦。それとこの間、新聞でも見ましたが、フリーマーケットが話題でしたね。

【奥山】二〇〇六年から始めたのですが、日曜日の昼間に、本や漫画、ビデオ、DVD、ガラクタ、衣類、小物やアクセサリなどを持ち寄ってフリマを開催しています。店の前の小スペースで屋台風に飲食物を売ったりとか。近くの駐車場を利用し、役者の卵がパフォーマンスを展開したり、吉本の若手芸人たちが登場したりと、なかなか賑やかです。何でもありのカーニバルみたいなイベント。この五月末にも予定していて、宇野亜喜良さんのイラストによるTシャツを制作したり、川柳のコンペをやったりと、企画も目白押しです。

【編集部】なるほど。それは一度見にいかなければ。新宿の混沌としたエネルギーは、いまなお健在ですね。

【奥山】六十～七十年代は、政治運動をやってドロップアウトした者や、ヒッピー、フーテン族、アウトローとか、オカマとか、ハミ出し者的な人種が多かったのですよ。まっとうな勤め人でなくても生きられる匂いがこの町にはありました。ゴールデン街は、東京という大都市の進化からずれたガラパゴス諸島みたいなものだったのです。

【編集部】いまはむしろ、それが貴重なのですね。まっとうな勤め人が、いまでは鬱病、自殺、リストラで、立場がない。大学や企業でプログラムを組んだ型通りの教育で養成された人間は、時代の混沌の中で、どうしたらいいかわからない。しかし、それまでハミ出し者だった多様な個性が混ざり合う場所で、新たな化学反応が生まれるかも知れない。南米の密林の奇妙な植物に、癌の特効薬が見つかるようなものです（笑）。というよりも、現代のガチガチに息苦しい管理とか、計画とか、計数化を越えた位相で、突然変異や、焼物の窯変みたいなものが期待できる自由な変容的空間をこそ、いま欲しいような気がします。

さっきアートの話が出ましたが、ゴールデン街で感じるの、一つ一つの店舗が、すでに個性的な作品だということ。そのままオブジェであり、インスタレーション。それぞれのマスターの濃密なライフワークであり、私小説であり、小宇宙という印象。そこが、タッチパネル式居酒屋とは、全然違うところですね。

ガラパゴスの奇人変人。マレンコフ、「フランシーヌの場合」

【編集部】お話を伺っていると、ゴールデン街というゾーン自体が、人間博物館・歴史博物館といえると思います。このお店『O2』の壁には、有名な流しのギター弾きのマレンコフさんのポスターが貼ってありますね。マレンコフさんが亡くなって、一部の週刊誌に載ったのはわりと最近だったと思いますが。蝶ネクタイの似合う、とても味のある風貌だった。

【奥山】二〇〇九年の秋です。本名は加藤武男さんといって、昭和二十年代から新宿で流しをしていました。もう、六十年以上ですね。肩を痛める前までは、アコーディオン演奏もやっていました。流しをやる前は、埼玉の軍需工場にいたといいますが、若い頃からずっと歌が忘れられなくて、流しに弟子入りした変り種です。

【編集部】マレンコフというのは、スターリンの後、旧ソ連の首相になったマレンコフに似ていることから、常連さんにつけられたとか。当時はまだソビエトや共産主義というものに、強い文化的な影響力があった。

【奥山】このポスターは、NHKのディレクターの大上典保氏の製作したドキュメンタリー『NAGASHI その名はマレンコフ』です。実は、六割くらいまで仕上がったところで、主人公が亡くなった。それからどうしようと悩んでいました。結局は思い出話で埋めることで作品を完成させ、はからずもマレンコフへの追悼作品になった。彼が亡くなってからはじめて、われわれも遺族と会いました。それまではほとんど音信不通、音沙汰が無かったそうです。そういう人柄なんですね。けれども葬式になって、これだけ大勢の人々に慕われ、愛されていたことに、親族は感動していました。昔は、ギター以外にも流しがたくさん歩いていたものです。三味線から、尺八、アコーディオン、ゴゼミみたいな人もいましたね。

【編集部】初夏の宵の口、カウンターでビールを飲みながら、生演奏という風情もいいですね。飲み屋に限らず、いまだこの店に入っても、濃密なコミュニケーションというものが失われています。人間の匂いがなくなっているのか、空間そのものがファミレス化、フラット化して、面白くないわけです。飲み屋の注文すらタッチパネルのみとか。われわれの生活すべてが、計数化の毒、データ処理の毒に、どんどん侵されていく。

……一方、この花園神社界隈の一画が漂わせている濃厚な空気というのは、特殊ゾーンというか、独特の霊界を形成している（笑）。機能的なビジネス都市東京とは別次元で、「異界」「あの世」に通じているかも知れない。花園神社境内に、唐十郎の赤テントが似合うゆえんですね。「あの世」といえば、シンガーソングライターの草分けの高田渡などもそうですが、ある時代を象徴するような人物のドキュメンタリーが、凄く面白かったりする。私なども知らなかったアーティストとかを、亡くなってから知って「死後追っかけ」になったりしています。

【奥山】故人といえば、五月の連休中に『奈々津』のママの大久保さんさんが、九十二才で亡くなりました。いわばこの街の隠れた「顔」でした。彼女は、終戦直後、新宿駅付近の闇市に、毎日リヤカーを引いて商売していたのを、マッカーサー命令でこちらの住居に強制退去させられてきた。その時は反対運動を起こして、デモ行進までやった人です。だから、ゴールデン街の母みたいな存在で、店の経営者であると同時に、地主だった。

先程の街の復興の話ですが、デコボコ路地で酔客が転ぶのを見ても、店主の立場からは補修の必要性をなかなかいえないわけです。それをなんとかしようとした「花園ゴールデン街を守ろう会」の主旨に、地主さんの立場から、ただ一人賛同してくれたのが、さんさん。彼女は元教師だったとかで、人望もありました。僕からすれば大先輩なのですが、心情的にはゴールデン街復興の同志みたいな存在です。

フランシーヌの場合。その淋しさの背景

【奥山】記憶に残っている故人を挙げていくと、もう、きりがありませんが、郷伍郎のことも、ときどき思い出しますね。

【編集部】郷伍郎というと、『フランシーヌの場合』ですか。懐かしいですね。

【奥山】ベトナム戦争に抗議して焼身自殺したフランシーヌ・ルコントという、フランス人女性の新聞記事を見たことが、ヒントだといってましたね。

【編集部】……三月三十日の日曜日、パリの朝に燃えた命ひとつ、フランシーヌ（笑）。こうして覚えているということは、やはり、なかなかの名曲だということでしょうか。

【奥山】一時は曲も大ヒットしたし、羽振りも良かったですね。毎月、あの曲の印税が振り込まれる貯金通帳を見せられたことがありましたよ（笑）。それに、CMの作詞作曲も、かなりこなしてました。「サクマのチャオ」とか、「牛丼一筋八十年の吉野屋」、それに、カルメン・マキなどにも曲を提供していた。何しろ「壊れたスピーカー」を自称するだけあって、声がでかい。そのドラ声で大風呂敷を広げ、自慢話をするので、カウンターにいる客も辟易する。でも後に、フランシーヌを歌っていた新谷のり子と、著作権問題で裁判沙汰になり、それには勝ったものの、何となくしょぼんとして、往年の勢いがなくなってしまった。奥さんにも逃げられて、晩年は孤独でしたね。いまでもあのドラ声が耳に残り、何か淋しさのようなものを感じます。

【編集部】売れっ子CMソングの作者が、フランシーヌという異国の女性の死に託して、自分の孤独を語っていたということでしょうか。

東京の見納めをした三島由紀夫

【奥山】文学関係でいいますと、実は作家の三島由紀夫が、亡くなる直前、ゴールデン街を訪れているのです。

【編集部】飲みに来たのですか。

【奥山】いや、そうではないのですよ。『奥亭』の向かい側にあった『銀世界』のママ、お寛ちゃんの話です。彼女はこの辺の稼ぎ頭なのですが、いつものように、何気なく路地に出した椅子に座っていると、不意にあたりの空気が殺気立ち、ものものしい出で立ちをした男達が三、四人、そこの角から現れた。目つきとか動作とかが、普通の客ではないのですね。これが三島由紀夫と、楯の会の一行だった。

【編集部】ええと、昭和四十五年ですね。憂国忌は十一月二十五日だから、その前か。ちょっと確認しますが、三島は、楯の会の制服を着ていたのですか。カーキ色の軍服のような。

【奥山】あの格好をしていたそうです。雑誌のグラビアなどで知っているのですが、間違いようがない。お寛ちゃんを見かけると、まぶかに軍帽を被った三島が優しい声をかけてきて、立ち止まってあたりさわりのないことを、二三話したらしい。

【編集部】それは、すでに死を決意した三島由紀夫が、愛弟子たちを引き連れて、東京の思い出深い場所を、見納めとして廻ったということでしょうか。わざわざ人目につく楯の会の制服で歩いたことに、何か意図的なメッセージが込められていたのかも知れない。一緒にいた男の一人は、市ヶ谷で共に自決した森田必勝……？

【奥山】全員が制服姿だったといいますから、おそらくそうだと思います。お寛ちゃんは、あの時のただならぬ気配と、奇妙に優しげな三島の口調が、焼きついているそうです。その直後、市ヶ谷での自決があった。お寛ちゃんはそうとう稼いで、バブルの末期に、練馬に家まで建てたのですが、わりと純なところもあり、連続射殺犯の永山則夫の『無知の涙』に感動して号泣したり、店の二階に閉じこもって自殺未遂をやらかしたりと、激しい一面がありました。そのお寛ちゃんの自慢話が、自決直前の三島由紀夫に声をかけられたこと、そして、軍帽の下のあの澄んだ眼差しが、忘れられないということでした。



世紀の奇書 『家畜人ヤプー』 沼正三
日本人のマゾヒズムを暴いた非国民的文学か？
人間性の深淵をえぐる世界文学の傑作か？

【編集部】三島由紀夫の話が出たので、その三島が絶賛した世紀の奇書『家畜人ヤプー』の作家・沼正三について伺います。本名が天野哲夫ですね。

この作は『奇譚クラブ』連載の覆面作家の手になるもので、最高裁判官の倉田卓次説などいろいろあって、話が実にややこしいのですが、複数の資料を見ると、やはり作者は代理人と称する天野氏ではないかと。よく『奥亭』にも来られたそうですが、どんな人物でしたか。

【奥山】銀髪のスラリとした感じの温厚な紳士ですよ。女の子にいわせればステキなおじさま（笑）。新潮社に勤めていました。僕も何度か話したことがあり、『家畜人ヤプー』は読んでましたが、直接の作品の話は、何となく避けていました。ある日、うちの店で飲んでいて、どうして世の中には、オカマやゲイが出現するのかという話題になり、沼さんは、生物学的な要因と、社会的な要因があり、後者の方が強いのではないかといいましたね。

【編集部】「今こそ話そう、私が『家畜人ヤプー』の作者だ！」（『東郷建の突撃対談』）というインタビューによると、沼さんが戦後いちばんショッキングだったことは、日本中がみんな打ちひしがれているのに、パンパン（売春婦）が堂々と歩いていたという現実ですね。価値観がまるっきり逆転した。かつての帝国軍人が、復員服を着て、舐めんばかりの格好で、パンパンの靴磨きをしている。構図としては、下から女王様を見上げるポーズ（笑）。これは素晴らしく衝撃的であり、革命的な光景だと彼はいつている。この辺が『家畜人ヤプー』の作者たる所以ですね。しかし、どうもこれは逆立ちした三島由起夫じゃないか。三島というのは、深沢七郎もそうだけど、自分を反転して写し出す鏡と出会うと、異常反応するところがありますね。……それはともかく、実は何を隠そう、マゾヒズムこそが、沼さんにとっての「精神の自由」の証しなのですね。まあ、いまどの分野を見ても、精神の活力を失っているわけですが、人間は不自由を主体的に選択するほど自由である一という逆説を彼は提示している。

【奥山】実際に、沼さんは、終戦直後、靴磨きや、闇屋、チリ紙交換、バーテンダー、探偵社勤めなど、いろいろな職を経験したようです。結核でも長く入院生活をしていた。その後、ひよんなことから出版業界に入った。最初は平凡社の百科事典作りのアルバイト。その平凡社との縁が、チリ紙交換時代に「紙をたくさんくれるお得意さんだったから」（笑）。その後、新潮社に入社した。

【編集部】しかし、どうやら本人は、靴磨きという職業を、いちばん熱愛していたらしい（笑）。あの作品は

、早く海外に訳されたらいいと思う。日本人の持つ変な部分や、マゾヒズムを、あれだけ客体化し、意識化している思想小説の存在に、驚嘆するのではないか。まあ、その集合意識的なマゾっ気がわざわざいしてか、いまだこの国はアメリカの実質植民地なのですが。それはともかく、あの思考実験とリビドーの構築的密度は、純文学とか、SFとか、哲学小説とかのジャンル分けを超えた文明批評となっている。日本語の達者な外人作家は、ヘンな私小説を書いてヤニ下がってみせるより、むしろ『家畜人ヤプー』や、埴谷雄高の『死霊』を英訳した方が、遙かに文学史に寄与するのではないかと（笑）。

【奥山】沼さんについては、じつは不思議な話があるのです。そこに『まえだ』という文壇バーがあったのですが、ある日、沼さんが早い時間から路地に立っていた。

【編集部】まだ店が始まらない夕刻ですね。

【奥山】僕も何気なく、ああ、沼さんが来ているなと思って、店の整理とか片づけもあって、そのままにしていたんです。ところが、それから一時間経っても、まだ同じ場所に立っている。まだ『まえだ』が開いてないのだろうと思って、洗い物を続けていました。ところが、まさにその同時刻、『まえだ』のママは、緊急入院していたのですね。喉頭ガンだったか咽頭ガンの、生きるか死ぬかの大手術。何しろ若い時からの酒豪でしたから。

沼さんは、あの日、暗くなってからも、何時間も同じ場所で、じっと立ち尽くしていた。他の店にも入らずに。銀髪のダンディな紳士だから、妙に目立つのですね。

少なくとも一時間とか二時間ではありません。何を思っていたのでしょうかね。あえてその後、本人に尋ねもしなかったけど……。

【編集部】ほかの店にも入らずに、ですか。靈感、虫の知らせのようなものがあったのか。

沼正三は二〇〇八年に亡くなりましたが、作品のみならず、やはり本人も、不思議な人ですね。

昔のオカマには思想があった。ゴールデン街長屋の話

【編集部】 ゴールデン街歩いていると、よくオカマさんに低い声で呼びかけられますが、何か昔と違ってきたところがありますか。

【奥山】 少なくなりましたね。いまより七十年代頃が、いちばん多かったです。それに最近、ゲイというのがニューハーフというのか、みんな綺麗ですね。化粧やファッションもレベルが上がったし、本物の女性と見分けがつかない。美少年がそのまま美少女になっているような。昔は、みんなごつかったですよ（笑）。逆に、彼らは疎外感や屈折を抱え込んでいて、それがアイデンティティーや思想になっていて、一本スジが通っているところがあった。最近の子たちは、それが感じられないですね。この奥に店がある東郷建さんなんかの本を見ると、性と政治が結びついていて、その辺がよくわかります。反権力という文化を持っていたのですね。

【編集部】 日本雑民党の東郷建さんですね。『突撃対談』という本をお借りして、たいへん面白かったです。『噂の真相』の岡留編集長や、写真家のアラキー、亡くなった赤塚不二夫へのインタビュー集。これだけで、もう、ある時代の匂いがしてくる（笑）。共通して、新宿ゴールデン街を、解放区として維持しようという意志がありますね。最近、親しいオカマさんについて何か。

【奥山】 昨日も店に遊びに来ましたが、マキちゃんかな。すぐそこの店のママ。だんだん酔ってきて、「外国で手術したアソコ見たい？ 見るなら一万円」というので、酔狂な客がお金を出した。おもむろにスカートをめくって下半身を晒していました。

（とって、奥山氏はケータイ画像を見せる。「マキちゃん」が両手でスカートをつまんでいる。向かいに、客の微苦笑。ただし、背後からの撮影で正面は写っていない）

昼間は月島の路地と化す、ゴールデン街長屋

【編集部】 今回は、はからずも、東日本大震災や、福島原発事故を挟んでのインタビューになってしまいました。最近、あまりにも壮絶な天変地異、ドラスティックな変化が多すぎて、個々の人間を懐かしむとか、マンウォッチングや、人柄を伝えるエピソードを楽しむという心の余裕もなくなりました。最初はメルトダウンではないと言い張っていた福島原発も、東電や原子力保安院の情報はデタラメで、一向に解決しない。それどころか原発事故以来、首相官邸そのものも、アメリカの支配下にあるらしい。GHQ・進駐軍なんて歴史的存在だとばかり思っていましたけどね。

というわけで、東京も関東平野も使えなくなるとか、脱出した外国人たちは日本に戻らない等という噂が流れている時、飲屋街を語るインタビューは、季節外れかも知れません。しかし、不安と恐怖に巻かれてみても、何もプラスはないのであって、その人間が何十年か生きてきた日々の営みのリアリティ感覚を、失ってはいけません。

【奥山】 日常のリアリティといえば、ここは面白いですよ。夜は酔っぱらいの猛者を相手に、しっかりカウンターを仕切っていたり、きわどいキャッチバーをやっているママたちが、昼間はこの路地に椅子やテーブルを出して、お茶を飲みながら、普通のオバチャンに戻ってのどかに世間話をしているんです。夏なんか、ウチワ片手にタバコを喫ってね。何しろお昼時なんて、「奥山チャン、片付けはもういいからさ。こっち来て、一緒にご飯たべなよ」ですから……。

【編集部】 いいですねえ。まるで月島の路地裏だ（笑）。いまは、地域のそういうやりとりが貴重ですね。人間の個性のニュアンスや、人の匂いのする町を面白がるという、パニック心理と対極にある視点を持つべきではないでしょうか。横丁長屋のご隠居さん、路地のオバチャン達のリアリズム。こんな凄絶な時代にこそ、モンテニューや吉田兼好ふうの、本来の意味でのモラリスト、道徳家ではなくて、人性批評家の温かみと、皮肉のきい

た中庸の知恵が必要だと思います。

【奥山】 ゴールデン街の閑雅な昼の顔を、あまり客は知らないでしょう。洗濯物を干したり、水を撒いたり（笑）。じつは、夜と昼の両方を含めて、ひとつの街のリアリティがあるんですね。

【編集部】 なるほど。大切にしたいのは、ゴールデン街が長年培ってきた、街がゆっくり熟すという感覚。プランナーによる都市計画ではなく、街の熟成と自然発酵。ここは無意識にひとつの哲学を持っているゾーンではないかと感じます。

瓦礫の夕暮れに灯る赤ちょうちん

【奥山】最近、都の行政の方も、昔と違って何も言ってきませんし、むしろ景観を残そうという意向が伺える。僕もこの間、建築史の研究や、路上観察学会で有名な藤森照信さんのシンポジウムに呼ばれて話してきました。新宿という街の魅力とは何かというテーマですね。

ただ、それにはやはり、現状を維持するための創意工夫と、日々の努力が必要なわけです。放っておいたままでは、やがて老朽化し、崩壊するだけですから。

【編集部】メタファーとしての「街」とは、機械なのか、農地なのか――。農地に例えるならば、東京全体の都市風景が、ヘリコプターで農薬を散布するような大規模農法に染まっていく中で、この一画だけが、昔ながらの有機農法を細々とやっているようなところがある。時代から一周も二周も遅れたあとで、ようやく遺伝子操作されない東京本来の記憶のDNAを保っているのがわかり、その貴重さが再認識されてきた。

【奥山】そのDNAや土壌菌も、外からの力によって、容易に破壊されてしまいます。

【編集部】先程、「限界集落」という言葉が出ましたが、いま日本中の地方都市の中心部に、シャッター街が出現している。イベントや祭りなどで、何とか住民たちを集客したり、コア・ゾーンを回遊させたいと知恵を絞り合っている。ゴールデン街は、ママさんやマスターたちの高齢化も重なって、まさに「限界集落」になりかかった。しかし、ここに来てしぶとく甦ってきている。

明るくて元気だけが取り柄で、その実、利潤極大化だけが目的のタッチパネル式居酒屋チェーン店や、似たりよったりの無機質のファミレス空間にうんざりした客たちが、別のものを求めている。外人観光客にとっては、秋葉原と同様に東京名所でもありますね。東京の「ガラパゴス」は、ここに来てかつての生態系をそのまま温存する文化特区として、見事に甦ってきた。

【奥山】ただ、ロマンだけではやっていけません。昭和のノスタルジーは分かるし、残すべきだと思うのですが、現実の維持が大変なのですね。戦後すぐからのバラック長屋の危険性もある。火事だけではなく、ここは急な階段なので、深夜に酔っばらって足を滑らせ怪我する客がいる。僕が知るかぎり、三人ほど亡くなっています。もちろん、ここ何十年という長い単位ですが。

【編集部】それはあながち、階段のせいばかりとは……。確かにガラパゴス島は、岩だらけで危険性はあると思います（笑）。いまは、商品でも何でも、技術革新と価格競争が苛烈なわけですが、このヒステリックな付和雷同的進化が、はたして人間にとって価値あるものなのか。むしろ、進化から外れた吹溜まりのようなこの小ゾーンが、まるごと東京全体を「異化」してガス抜きしているかも知れない。しかも、外人観光客にとっては、すでに東京の象徴にすらなっている。

ここにいると、マーケティングや、統計・世論調査の嘘から解放される。現代人には、いつのまにかそれらが、強迫観念になっているのですね。ゴールデン街という、町の化石、シーラカンスが生きていることで、「闇市の記憶を残す風景」を西新宿の高層ビルや、都庁ビルの脇に突きつけ、この六十年に東京がどこへ向かってきたかを、逆照射している気がします。

建築家にいわせると、西新宿はル・コルビジェふうの理想を結実させた空間だそうですが、それは、いつけん美しい幾何学的荒涼ともいえる。空間に熟成がないから「詩」が感じられない。建築家や、都市プランナー自身は、膨大な予算が使えて楽しいでしょうけど、歩行者にはむしろ、抑圧と無力感を感じさせますね。

【奥山】人間というのは、回遊性といって押しつけられると、逆に回遊したくなくなる場所がある（笑）。

【編集部】作為を感じると、駄目ですね。ゴールデン街は自然発生 of 小さな歴史博物館、京都に喩えれば、多少雑多な花見小路のようなものではないか。

【編集部】ところで、このゴールデンウィークに、仙台の石巻方面に、一人でボランティアに行かれたとか。

【奥山】ええ。故郷が山形ということで、東北の被災者達の映像は、他人事ではない気がしました。仙台から北に行く電車はすべてストップしていて、宿泊の予定も立たないような行き当たりばったりの旅です。とにかく、非常に寒かったですね。石巻では、津波のヘドロの泥かき作業に加わりました。もう一人のボランティアとチームを組んで所定範囲をこなしたのですが、体がヘロヘロになるような重労働の後で、不思議な充足感がありました。

……今回の地震では、ゴールデン街も、店のボトルやグラスが落ちて割れるし、路地の一部の壁も剥がれたりして、大変だったのです。

しかし、考えてみれば、戦後の東京も、空襲で荒廃した焼跡闇市から始まったのです。いまは瓦礫だらけの海べりにも、やがて赤ちょうちんが現れ、屋台が現れ、そして人々が集まり、新たなコミュニケーションの基点となる。そう考えると、バラックがそのまま店舗になっているゴールデン街と、どこか重なるところがある。東京のガラパゴスのように思えたゴールデン街は、じつは街の復興の「元型」ではないかと思いました。

【編集部】人々がそこで生活している以上、いつしか酒をくみ交わす原初的なバラック屋台が出現する。これは凄いイメージですね。都市の生命力の起源（笑）。ゼロ地平としての焼跡闇市、そこから始まったゴールデン街。東京はもっと「闇市」という記憶を大切にすべきかも知れません。下北沢の駅前マーケット、吉祥寺のハモニカ横丁、ほんとうは、ああいう空間は、深い象徴的意味を持っている。この隠された「闇市」の気配が、じつはわれわれの潜在意識や、右脳や、DNAを、刺激してくる。作られたインチキ臭い昭和の香りではなくて。しかしその豊かさも、収益性というニンジンぶら下げられると、見えなくなってしまう。

【奥山】いま地方都市には、巨大ショッピングモールができた後、誰も来なくなったというところがたくさんあるらしいですね。オープンしたものの、採算が取れず、外資もさっさと引き上げてしまう。結局、それで地域社会や、コミュニティが、根底から破壊されてしまう。ここはその対極にある町ですね。……最近になってようやくこの花園ゴールデン街も、このままやっっていけるという確信が持てるようになりました。大震災や法改正でもない限りですね（笑）。

一方で、新しく来た若い店主やお客さんは、何でもありのアナーキーな街だと思ってしまうフシがある。ここは解放区ではあるけれども、無法地帯ではない。解放区には、解放区なりのルールがある。やはり苦勞して残してきた街なので、そここのところを理解してもらって、この街を訪れるみんなが長く楽しめるような街を、これからも存続させていきたいと思います。

【編集部】この町のアナクロニズムこそが、未来の創造に貴重ですね。大袈裟に言えば、人間を膨大な「量」として扱う機械的操作性への砦であり、アンチ・テーゼ的なモデル地区ではないかと思います（笑）。

いまや、チェルノブイリ周辺のゴーストタウンの映像が身近に感じられるという、トンデモない日本のご時世ですが、実際にゴールデン街とは、何と豊かでファンタスティックな迷路空間なのだろうと思います。これは酔っぱらいの喧嘩や、カウンターでのヒトの悪口、店同士のライバル意識も含めてですが、そんな平凡な長屋的瑣事すらも、素晴らしい文化風俗に思えます。

夕暮れ時、荒廃した浜辺の瓦礫の向こうに、自然発生的にともる赤ちょうちん。この灯が未来の希望かも知れません。この人間的リアリティの感覚をこそ、このささやかなインタビューで確認したいと思いました。――本日はお忙しいところどうもありがとうございました。

インタビュー・編集部／草原克芳 塚田吉昭

2011年3月・5月 新宿『O2』にて



リトル・マガジン『カプリチオ』35号

参考/Grasshouse・関連ブログ

「そうだ、新しき村へ行こう！」

<http://grassmoon.at.webry.info/>

東京ガラパゴス・タウン 新宿ゴールデン街が見ていた戦後日本

<http://p.booklog.jp/book/32545>

著者 : Grasshouse

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/grasshouse/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/32545>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/32545>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.